妊娠初期より分娩まで経静脈栄養を要した抗リン脂質抗体陽性クローン病合併双胎妊娠の1例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫野, 千明, 久保, 光太郎, 長谷川, 徹, 光井, 崇, 衛藤, 英理子, 鎌田, 泰彦, 中塚, 幹也, 増山, 寿 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004048

DOHaD 研究 (ISSN 2187-2597)
2021 年 第 9 巻 第 2 号 110 頁

第 45 回日本女性栄養・代謝学会学術集会
＜一般口演 4＞

妊娠初期より分娩まで経静脈栄養を要した抗リン脂質抗体陽性クローン病合併双胎妊娠の 1 例

1）岡山大学大学院医歯薬学総合研究科　産科・婦人科学　2）岡山大学大学院　保健学研究科

樫野　千明
久保 光太郎 1)、長谷川 徹 1)、光井 崇 1)、衛藤 英理子 1)、鎌田 泰彦 1)、中塚 幹也 2)、増山 寿 1)

クローン病(CD)合併妊娠では早産、低出生体重児、血栓症のリスクが知られている。腸管狭窄が強い場合は中心静脈栄養（TPN）が必要となり、栄養状態を含め周産期管理に苦慮することがある。今回、妊娠初期より分娩まで経静脈栄養を要した抗リン脂質抗体陽性 CD 合併双胎妊娠の 1 例を経験したので報告する。症例は 26 歳、3 妊 0 産。18 歳で CD と診断され、翌年に回盲部切除術を施行し、メサラジン、アダリムマブ、成分栄養剤が投与されていた。結婚後 3 回妊娠するも、全て 10 週未満で流産となり、不育症の原因精査目的に当院へ紹介された。スクリーニングでループスアンチコアグラント、抗カルジオリピン抗体 IgG が陽性であったが DD 双胎の妊娠が判明したため、抗凝固療法として低用量アスピリン・ヘパリン併用療法を開始した。妊娠 5 週に腸閉塞を疑われ入院し、吻合部から口側へ約 20cm の腸管狭窄を認めた。内科指示によりメサラジンは妊娠 6 週で中止し、妊娠 12 週に退院するも 4 日後に症状が再燃し再入院となった。妊娠子宮によりストーマ造設が困難であるため、可能な限り保存的に管理する方針となった．妊娠 18 週に TPN を開始、妊娠週数に応じて投与総カロリー量を 840～2040kcal/day とし絶食を継続した。アダリムマブは効果的ではなく、妊娠 30 週で中止した。妊娠 36 週以降も尿蛋白は認めなかったが､血清クレアチニン(Cr)や AST が徐々に上昇し､手術前日に収縮期血圧が 140mmHg 以上、血清 Cr 1.04 mg/dl、AST 43 U/l となったため妊娠高血圧腎症と診断した。妊娠 37 週 4 日に脊髄くも膜下麻酔下の予定帝王切開術にて 2 児（第 1 子：女児、2500g、第 2 子：女児、3030g）を出産され、引き続き全身麻酔下に回腸ストーマ造設を行った。産後は血圧や腎・肝機能は速やかに改善した。そして産後 2 か月で回腸横行結腸吻合部切除術を行った。